

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447

編集
責任者 中嶋 博

印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料1000円)

1988年9月25日発行

第20巻第9号

(毎月1回25日発行)

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 20 No. 9

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

日本とスウェーデンの重なる慶び

The Double Congratulation for Cultural Exchange

顧問 小野寺 百合子

Adviser, Mrs. Yuriko Onodera

Sången från
OGURA
Den japanska lyrikantologin
OGURA HYAKLININ ISSHU

-En dikt värderad
av bundna poeter -
i svensk version
av SHÖZŌ MATSUSHITA
och PER ERIK WAHLUND

Med bundna kalligrafier
av Hiroko Kimura

Bra Lyrik

松下正三氏が6月3日、ウプサラ大学の名誉哲学博士の称号を受けられることは、月報第4号で既に報じられた。ストックホルムの新聞に月桂樹の葉の冠をかぶった松下氏の写真が載ったのは日瑞両国にとって慶

こぎつけられたのである。

百人一首の一首ごとに毛筆の歌とローマ字での発言、スウェーデン語で逐語訳と意識、それに丁寧な解説がついていて、一首に2ページづつ、を費した豪華版である。これだけでも十分名誉博士の価値があるかと思われる。スウェーデン人の間には日本の文学には和歌とか俳句とか、極端に短い詩型にゆたかな詩情を盛り込んだものがあるという事は、かなり知れていたから、こんなにも立派な百人一首が出版されたことは余程驚いたものと見える。全国の多くの日刊新聞が大きく取上げ松下氏を称えている。

びであった。この栄誉の理由は、氏の瑞日辞典および日瑞辞典を編さんされた功績による。スウェーデン研究を志す人ならどんな分野であっても、この辞典の恩恵にあずからない人はいないであろう。

ところが松下氏がウプサラの晴の儀式に出席のためスウェーデンに滞在中、氏には第二の慶事が訪れた。それは彼氏が長年の間、公務の間に少しづつ、忍耐強く進めて来られた「小倉百人一首」のスウェーデン語全訳が完成し、ストックホルムのブラー・リーリック社から出版されたことである。松下氏の親友ワールンド氏との共訳とはいうものの、この仕事はもう何十年も前から計画されていたものであった。それが見事な本となって出版に

目次

日本とスウェーデン の重なる慶び	小野寺百合子… 1
ママさん学生の見たスウェーデン の大学教育	福本歌子… 2
SIP ニュース	4
(新刊紹介)	5
平和国家への研究(小野寺信遺稿集)	
日瑞新時代の幕開き(川崎一彦著)	
新世代の保育をデザインする(荒井冽著)	
Current Sweden の目次一覧(12)	6

ママさん学生の見たスウェーデンの大学教育

Göteborg 大学法学研究科 福本歌子

一、家人の留学に従って渡瑞してすでに6年になる。こちらに来た当初から、スウェーデン語習得のためあるいは本人の専門に関する学科（法律）へ出入りさせていただいたこともあり、当地のイェテボリ大学でいくつかの授業を学生として受ける機会に恵まれた。人文学部日本語科の非常勤講師として明治以降の憲政史を講義したり言語クラスを教える機会も得たが、ここではとりわけ昨年の秋学期から正規学生として受講している政治学科の授業の印象を、いわゆる「社会人学生」あるいは「ママさん学生」の立場から簡単に述べてみたい。

二、具体的な印象を述べる前に、簡単にスウェーデンの大学教育制度の特徴を日本と比較して二、三記しておこう。

まず大学は基本的に国公立であり、授業料と名のつくものは一切ない。大学生として特にかかるのは、強制加入の学生組合費と教科書代だけである。

さらにいわゆる「入学試験」も一切ない。学科やコースに依り受講許可ないし入学の仕組は多少異なるが、大まかに分けて次の二種類である。一つは中央にある大学局（UHÄ）に出願するとそこで全国一律に処理して合否が決定されるタイプで、例えば医学科、法学科、教員養成学科などのように、そのコースの単位を全て取得すると一定の資格や職種につく条件を認められるもので、一連のコースとして linje と呼ばれるものは皆そうである。

もう一つは各大学が独自に設けている学科目で、*enstaka kurs* と呼ばれ、直接大学に出願し大学当局が合否決定を行なうタイプのものである。この単独科目は大学の各学科が毎学期学生を募集しており、学科内容は多岐に亘って豊富で、昼間部の他夜間コースや遠隔地者のための週末集中コースなども設けられていて大学を社会に開放するの

に大いに役立っていると思われる。いずれのタイプにしる、合否決定は高校の成績、就業経験年数その他を考慮して行なわれる。そのため例えば医学部などの特に人気の高いコースには、高校卒業後そのために何年か働いて労働点加算をして入ってくる人も珍しくない。いずれにしても、日本のような特別の技術を要する入試が存在しないので、一定の資格要件を満たす限り、誰でもどの年齢の人でもそしていつからでも大学で学ぶという意味でまことに開放的である。

その他、秋と春の二学期制で、いずれも新入学者のある新学期である場合が多い。

またフルタイムの学生は、ほぼ生活費のカバーできる貸与奨学金を借りる者がほとんどで（月額約3500クローナ、家族子供のいる者は割増もある）ある。しかし毎学期一定単位以上取得しないと奨学金の継続ができない仕組みになっているので、学生は生活をかけて勉強しているという感がある。大学生で親が子の生活費や学資を面倒みるという例はあまりきかない。

三、87年8月から当時一歳半になった次男が四歳半の兄と同じ保育園に行きはじめていたので、心機一転筆者も主婦業から学生になることにした。以前も大学でスウェーデン語の単位を取得したり、法学科の授業を聴講したりしていたが、今回のようにスウェーデン人の学生と混じって同じ条件で単位取得をするのは始めてであり、いわば内側から感じた印象をいくつか書いてみたい。

最も日本とのちがいを感ずるのは授業方法であろうか。

まず授業は集中授業方式である。学期のはじめに予定表、文献リスト、講義要綱が配布される。一学期間の授業はいくつかの単元科目に分けられているのが普通で、単元が変わるごとにはじめにオリエンテーションが行なわれ授業のすすめ方や

文献の解説などが、なされる。各單元ごとに、講義、ゼミ、グループ作業、演習、レポート、テストと盛りこまれていて変化に富んでいる。学生としては一定期間まとまりのことを集中して勉学できるのは何科目も同時に少しずつ学ぶよりも効果的であると感じた。

次に文献の量の多さに驚く。本やコピーをあわせて、平均七百頁を数週間の一單元内に読みこなさなければならない。スウェーデン人にとっては外国語の英文の著作も混じっていることが多い。單元が一つ終わる度に文献や授業方法・内容に関する評価を求めるアンケートを毎回書かされたが、そういった学生の反応も含めて毎年・毎学期ごとに、より効果的な授業にしようという学科の熱意を感じた。

さらに教員の陣容も特徴的である。集団指導体制とでもいうのだろうか、各單元ごとに数人の教員スタッフが單元をいくつかのモメントに分けて分担して受け持つが多い。87年秋の政治学コースでは延べ10人の教師が入れ替わり立ち替わり登場したものである。しかし通常学部レベルではプロフェッサーはほとんど授業を行わず、専ら若手の講師・研究者にその教育は任されている。教授職は私立大学のないスウェーデンでは一定数の限られた権威職であり、その職務は自己の研究、研究室の運営そして大学院生の指導といわれる。

最後にテストについて、これも大分日本とちがう。単位取得に関する判定であり、最も大変なのは筆記試験である。試験当日は学生は筆記試験専用の大教室に集合し約4時間缶詰になって論文式の設問に答えるわけである。指定文献から大体まんべんなく7ないし8問出されているようだ。しかし何といても長時間戦なので、たいがい飲み物やサンドイッチ、果物などをピクニックよろしくずらりとテーブルに並べて気分転換に飲み食いしながらのテストである。また喫煙のための隣室への外出も自由である。試験中係のおばさんが調べに回ってくるのが、学生証ではなく、実に学生組合費支払済控であるのがいかにもスウェーデン的だ。その他科目の性質や学生数の関係で口答試験であったり、レポートや授業出席が単位取得条

件であったり種々である。

スウェーデンもある意味で学歴社会であり、大学での取得単位は就職や転職に際してのメリットとして重要視される。しかしここではどこの大学を出たかは問題ではなく、何を学んだかが重要なのである。

さて最後に最も特徴的な印象は、授業およびクラスのふん囲気がオープンでくつろいだものであるということである。科目の性質上か、87年秋の政治学コースのクラスメート60名中、外国人は筆者を含めて5名（他にガーナ、ケニア、イラン、デンマークから来た人）、身体障害者2名（車椅子で通学の肢体不自由者と聴覚障害者）、子供のいる学生二割弱、二十歳代後半から上の人三割以上、男女比半々及び就業経験者大多数という構成で、とにかくいろいろな人が混じっているなという感じがしたものである。とりわけ筆者は二人の子供がいるしクラスでも年長者かつ見かけの違う東洋人と、クラス内でもアプリアリに特異な存在であったと思う。さらに子供の病気で授業中に呼び出されたり、止むを得ず子連れ受講をしたこともあるが、教師とクラスメートの寛容な態度に救われる気がしたものである。これは筆者を特別扱いしてくれたというのではなく、そのままの状態が皆が受け入れたということだろうか。筆者の感じたオープンさというのは、例えば年齢、職業経験、家族生活、人種、人生経験などにおいて種々の人々が同じ科目を学ぶ学生として机を並べるといふ環境そして互いに異なるものを認め尊重するという個人主義の態度から来るのだと理解している。しかしそうはいうもの人間関係はあくまで個人的なものであり、筆者が最も親しくなれたのは40歳になる車椅子のアンナ・レーナであったのは互いに学習に種々の困難を感じている者同志の一種の連帯感からでなかったのだろうか。

日本でも一部の私立大学で社会人入学ができた、また外国人学生も増えてきたというが、大学院はともかく学部レベルはまだまだ閉鎖的なのではないだろうか。大学の一つの機能として本当に学びたい人にその機会を与えることができるのは重要なことだと感じる此頃である。

イングヴァル・カールソン首相の国連演説：
国連は軍備制限の国際検証のために最適の機関

スウェーデンのイングヴァル・カールソン（Ingvar Carlsson）首相が、6月1日、国連内での軍備制限と軍縮のための多国間検証システムの統合化の確立を求めて開かれた軍縮のための国連総会臨時会議において演説を行なった。首相は核保有国に対し、それらの国々の船が寄港する際に、核兵器搭載の有無を肯定も否定もしないという従来の政策を廃止するよう訴えた。カールソン首相は、また、核兵器を搭載する軍艦は国際的安全保障への脅威であると述べ、海での軍事紛争の危険を減じるための相互協約に関する交渉の必要を提案した。

首相はさらに、あらゆる国に国際関係における法規を支持し、軍備制限条約を遵守するよう呼びかけているシックスネーションイニシアチブ（the Six Nation Initiative）のストックホルム宣言に言及して、国連こそ国際社会を代表して検証機能を実行するのに最適の機関であると述べた。国連は多くのユニークな活動が可能であり、例えば、オブザーバーや専門家の提供といったような検証措置に関するデータや情報の中央集積所となるのに最適の機関であると共に、既存の、また、将来の軍縮協定の検証に関する法的、技術的アドバイスを提供する場となるだろうということである。

なお、カールソン首相は、かつての国連40周年の演説で、全般的で完全な軍縮につながるプロセスの一環として核兵器の使用を国際法で禁じる可能性が考慮されるべきだと述べた彼の前任者である故ウーロフ・パルメ（Olof Palme）について語った。

また、首相は米ソの首脳が核戦争の勝利はなく、決してそれが起ってはならないという共同宣言を行なったことは大いなる励みであり、その他の核兵器保有国のリーダーも同様の宣言をなすべきであると述べた。それについては国連総会の演壇はその種の重要な政治宣言のための価値ある場を提供するであろうということだ。さらに、首相は化学兵器の使用を禁止する通例の国際法及び1925年のジュネーブ協定付随書のあからさまな違反としてイランのハラブジャ市への大規模な化学兵器使用について言及し、この種の攻撃は国際的に糾弾されねばならないと述べた。

最後に、カールソン首相は5月末に米ソによって批准されたINF全廃条約は軍縮への緊急な過程における重要な第一歩であるとしながらも、これで十分とはいえず、さらに多くの事柄がなされるべきであると述べた『我々は言葉を行行使すだけでなく行動に移るべきだ』と首相は強調した。

スウェーデンの保健・医療に関する新しい統計年鑑

中央統計局が健康、不健康、公共医療サービスに関する新年鑑「スウェーデンの保健・医療統計年鑑1987/88」を発行したが、それによると、スウェーデン人の平均寿命は伸び続けているが、同時に心臓血管の疾病による死亡者数が増加しているという。

心臓血管の疾病、腫瘍、ガンといった年齢に相関のある疾病が、目下、スウェーデンの公共医療サービスが直面する最も一般的で長期的な問題である。片や、伝染病の発生率及び死亡率は急速に減少している。

1984/85年度には16—84歳の人の約40%が長期的病気にかかっていたが、彼らの4分の一が、その結果として労働能力が低下したと述べていたという。アルコールは健康を害する主因であると同時に突然死の要因でもある。レポートによれば、溺死者のおよそ半数は飲酒者であったという。また、もう一つの病気の要因が食物で、ガンの30%がそれが原因だといわれる—中でも最悪なのが脂っぽい料理といわれる。

60年代及び70年代には、保健支出の対GNP比が急速な成長を遂げたが、80年代になると、それが止ま

り、1982年度後はGNPの9%にまで落ち込んでしまった。ただし、未だ公共消費の約4分の1=620億クローナ（1兆3,640億円）が毎年この目的のために充てられている。

中央統計局の年鑑は、公共医療サービスの需要に少なからぬ地域的差異が存在することを指摘している。概して、大都市居住者の方が地方居住者より医療施設を利用する率が高い——例えば、マルメ、ヨーテボリ、ストックホルムの住人のそれらの施設の利用度はスウェーデンの平均の2—3倍であった。

年鑑の発行と同時に、中央統計局では公共医療サービスについての世論調査報告を出したが、それによると、初期治療サービスの拡張、小病院の保存、専門家サービスの集中化を目ざす政策への明らかな支持が認められるという。なお、保健は社会サービスの中でも最優先事項に位置づけられている。概して、スウェーデン人は与えられるサービスに満足しているものの、長期的ケアの提供については批判があるという。因みに、ストックホルムの住人の約80%が老人ホームの改善を要求していた。

スウェーデンの研究開発費、現在GNPの3%

産業相ターゲ G. ペテション (Thage G.peterson) の最近の演説によれば、スウェーデンの研究開発費は相かわらず国際水準に照らしてみてもハイレベルにあり、1987年度の研究開発費は初めて対GNP比が3%を突破するだろうということである。これは、研究開発費の対GNP比が高い米国、西独、日本に比べても高い数値であり、金額的にはスウェーデンでは年間300億クローナ（邦価約7,200億円）が、ノウハウや新製品の開発及び製品の改良のために投資されていることになる。なお、スウェーデンは、欧州研究開発協力プログラムユーレカ (Eureka) の全部で165あるジョイントプログラムのうちの32に参加している。

新刊紹介

『平和国家への研究』

小野寺信遺稿集

本書は、昨年逝去された当研究所顧問小野寺信氏の一周年に当って催された同氏を偲ぶ集いの折、記念の資料としてご遺族より出席者一同に配布されたものであるが、故人がわが国の平和国家としての発展を強く希求していたことを知ると共に、そのために尽くされた戦前、戦後の業績の偉大さに、今更の如く深い敬意を表する次第である。（非売品）

『日瑞新時代の幕開き』

川崎一彦著

本書は、財団法人スウェーデン交流センターの創立5周年を記念して刊行されたものである。著者は、1976年から本年3月まで、日本貿易振興会（ジェトロ）ストックホルム事務所で、実務家として、また理論家として調査、経済交流を担当された方であり、その記述された内容は極めて迫力あるものとなっている。スウェーデンの社会に関心のある方々の一読を是非おすすめしたい好著である。

（財団法人 スウェーデン交流センター刊、¥2,000）—H.N.—

『新世代の保育をデザインする』 スウェーデンの試みをヒントに

荒井冽著

幼保一元化は先進諸国の動向であるにもかかわらず、昨年の臨教審答申でもふれられなかった。さて本書は、福祉社会スウェーデンの幼児保育の内容を、専門家の立場から、また数度にわたる現地調査の結果にもとづき検討したものであり、今後の我が国の幼児保育の向上に資するところ少なくないと思ふ。

（筑摩書房刊、¥1,400）—H.N.—

Current Sweden の目次一覧 (12)

スウェーデンの政治、経済、文化などあらゆる方面のトピックを速報する The Swedish Institute 発行の Current Sweden 最近号の目次をご紹介します。(Vol. 18 No. 6 につづく)。

内容についてのご照会には、当研究所も可能な限りお答えいたします。(事務局)

No.	Date	Title
345	'86.4	Karl Grunewald : The Intellectually Handicapped in Sweden—New Legislation in a Bid for Normalisation
346	6	Åsa Klevard and Christina Sternerup : The Engineer Shortage and Engineering Studies—What is Sweden Doing ?
347	8	Paul Lindblom : The Swedish Family : Problems, Programs and Prospects
348	9	Staffan Herrström : Swedish Family Policy
349	10	Johan Hirschfeldt : An Ombudsman against Ethnic Discrimination
350	12	Tina Lundh : Computerization at Work
351	12	Håkan Eriksson : Current Medical Research
352	'87.1	Björn Linnel : Some Notes on the Literary Scene
353	2	Karl—Axel Edin : Sweden after Chernobyl : Consequences of the Nuclear Accident
354	3	Eric Dyring : Sweden after Chernobyl : Revival of the Nuclear Power Debate
355	6	Jan—Peter Strömgren : The Disabled in Sweden : the Provision of Technical Aids
356	7	Ulf Sörenson : A Swedish Ecomuseum The Art of Engineering a Landscape
357	8	Greger Wahlstedt : The Swedish Credit Market in Transition
358	'88.3	Kristina Ahlén : Recent Trends in Swedish Collective Bargaining : Collapse of the Swedish Model
359	3	Kristina Ahlén : Recent Trends in Swedish Collective Bargaining : Heading Toward Negotiated Incomes Policy ?
360	4	Arvid Lagercrantz : Election Year '88 : The Political Scene in Sweden Prior to the Autumn Parliamentary Elections